

「アトラクション民謡歌詞「男なら」・住吉神社「お船謡」」（佐々木均文書158）

戦いノオト②

## 幕末の歌(1) ～「男なら」～

### 【「男なら」と女台場】

幕末の長州藩では尊皇攘夷運動が高まり、文久3年（1863）には5月10日の「攘夷期限」をまえに藩士の多くが外国船攻撃のために下関に集結しました。5月10日から26日にかけて長州藩はアメリカ・フランス・オランダの船を砲撃しましたが、被害を蒙ったアメリカ・フランスはただちに報復攻撃を行い、長州側に大きな被害を与えました。

そうした状況下、城下萩でも外国船の攻撃に備える必要が生じ、菊ヶ浜沿いの海岸に台場（だいば）を築くことになり、あらゆる階層の庶民、留守を守っていた藩士・諸隊士らの妻や子供たちも競って工事に携わりました。

「男なら」は尊皇攘夷の熱に浮かされた長州で、台場の工事に携わったさまざまな人々によって歌われたとされ、萩周辺を代表する民謡となっています。

この「男なら」の歌詞をめぐるのは、いくつかのバリエーションと改変があります。そのことは、のちに「女台場（おなごだいば）」と呼ばれるようになるこの台場工事の喧噪と、その後の時代相を反映しているようです。

「男なら」の冒頭の歌詞は、おおむね

(a) 「男なら お槍かついでお仲間（ちゆうげん）となつて ついて行たや下関」

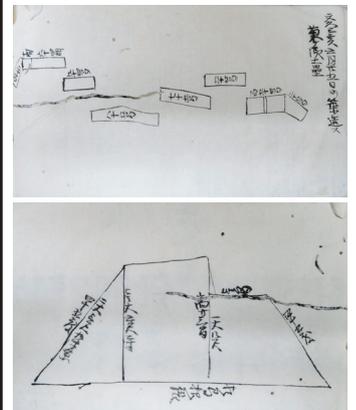
(b) 「男なら お槍かつがせお仲間を連れて 攻めて行きたや下関」

の2系統があり、(a) が昭和11年にレコード化されて広まりましたが、昭和49年には上の写真のように(b)で歌われています（裏面の歌詞の傍線部分）。

(a) と (b) にはニュアンスの大きな違いがあります。この歌は「男なら（自分が男だったら）」という立場で歌われますから、士分でなく百姓身分である「お仲間」になりたい、という部分と、続いて歌われる「女ながらも武士の妻」とは矛盾します。この女性が武士の妻であれば、(b) の歌詞の方がしっくりくるようです。

(b) の歌詞は村田清風の孫にあたる村田峰次郎（安政4年＝1857生）が記憶していたもので、氏の『防長近世史談』（昭和2年刊）に記載され、『山口県の民謡』にも、明治42年（1909）生まれの福永キクエ伝承の歌詞として記録されています。

### 菊ヶ浜土塁



「萩城付近守衛一件」（毛利家文庫 28 防寇 89）

上図の冒頭に「文久三亥六月廿五日ヨリ築造ス 菊ヶ浜土塁」とあります。上は海岸線における土塁の位置、下は土塁の構造（断面）図です。このうちの一つである「菊ヶ浜二之御台場二百分一平面図」が毛利家文庫 58 絵図 956 にあります。

(a) の歌詞は、あるいは百姓身分の人が、「せめてお仲間に」という気持ちで歌ったもので、それが後半部分と混在したのかもしれませんが。

さて、この歌の中ほど後半部分も、時代とともに移り変わりました。中ほどの部分は、「尊皇攘夷と聞くからは」が戦後に「お国の大事と聞くからは」と変わり、後半の「三韓退治がかがみじゃないかいな」は、戦時中に「神功皇后さんの 雄々しい姿が 鏡じゃないかいな」となりました。

とくに後半部分の変更は、いわゆる「日鮮融和政策」の強化に伴って変更されたようで、時代相をよく示しています（田中助一『萩民謡 男なら』等を参照しました）。

ところで、冒頭に述べたような長州藩危急存亡の秋（とき）にあつて、「男なら」の歌の舞台であったとされる台場の建設は、とても賑やかで、かつ華やかな、お祭りのような雰囲気の中で進められたようです。

藩は建設の士気を高めるために人々の服装を自由とし、歌舞音曲も勝手次第としたため、服装は華美となり、作業後の酒食や喧噪は深夜まで及びました。見物人も多く押し寄せたため、藩もたまたま、見物人や華美な服装、次の日に支障をきたすような騒ぎを禁止したほどです（「御黒印御書付御張紙控」毛利家文庫40法令92）。

工事は順調に進み、半年ほどで完成しました。

＊昭和2年刊の村田峰次郎『防長近世史談』に載せるもの

男なら  
お槍かつがせお仲間を連れて  
攻めて行ききたや下関  
女ながらも武士の妻  
まさかの時にはしめだすき  
三韓退治が手本じゃさうな  
おうしやりしやり

＊昭和11年にコロムビアレコードから発売された「男なら」の歌詞

男なら  
お槍かついでお仲間になつて  
ついて行ききたや下関  
尊皇攘夷と聞くからは  
女ながらも武士の妻  
まさかの時にはしめだすき  
神功皇后さんの  
三韓退治がかがみじゃないかいな  
おうしやりしやり

＊昭和30年に日本ビクターから発売された「男なら」の歌詞

男なら  
お槍かついでお仲間になつて  
ついて行ききたや下関  
お国の大事と聞くからは  
女ながらも武士の妻  
まさかの時にはしめだすき  
神功皇后さんの  
雄々しい姿が鏡じゃないかいな  
おうしやりしやり

### 大津絵（「てれん持」）

大津絵とは「大津絵節」のことで、江戸時代後期から明治時代にかけて全国的に大流行しました。三味線で伴奏する、娯楽的な短い歌謡で、宴席の座興や寄席で歌われました。

左は、菊ヶ浜の台場建造の情景と喧噪を歌った大津絵「てれん持」です。当時は大人気の歌だったようです。

\*\*\*\*\*

菊ヶ浜の御台場で、さても見事なてれん\*もち、  
町々の加勢事、三味や太鼓ではやしただて、  
ほんにお台場の事ならば、  
翁（おう）さま婆さまも打連れて、

雨の降る日も風の日も、朝の六ツの勢ぞろい、  
晩の七ツに引き揚げる、くたぶれ足でも厭わずに、  
明日もとうから出掛けましょ、  
八重萩の菊ヶ浜、さても見事なてれんもち、

数多のお女中は襦袢に小袖、黒の脚絆に白の紐、  
折り編笠でわらじ紐しめ土運ぶ、  
数多の諸役人は土手の上、

太鼓に拍子木法螺貝吹き立て、……

\*てれん…土を運ぶ手箕（てみ）のような道具か。

\*\*\*\*\*

この大津絵は、昭和10年11月6日の「防長新聞」に載っています。